

コロナ禍におけるグローバル教育の実践

大塚 圭 (外国語科)

1. はじめに

近年、高等学校の教育現場では、スーパーグローバルハイスクール(SGH)¹の認定や国際バカロレア (IB) プログラム²の実施、WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業³、次期学習指導要領に示されている主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング) への転換などの教育政策の影響もあり、従来の欧米諸国を中心とした異文化理解や英語学習だけでなく、地球的視野を持つグローバルシティズンの育成を目的とした世界各国との交流活動等を含むグローバル教育⁴を実践している学校が増えている。しかし、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行に伴う休校要請や緊急事態宣言の発令などにより、以前のような海外との交流を中心とした

プログラムを実施することは不可能となった。

本校では、カンボジアでの実地研修を伴うグローバルスタディーズやオーストラリアの姉妹校との交流、イギリス・オックスフォードでの英語研修などが中止・延期となった。現在においても外国人の入国禁止措置や日本人の渡航制限などのため、グローバル教育を実践することは難しい状態が続いている。また、国境を越えた人々の移動制限や先進国と途上国におけるワクチン格差など、一見すると、地球的視野を持つグローバルシティズンの育成を目指すグローバル教育とは異なる方向に進んでいるように感じる。しかしながら、新型コロナウイルス感染症は、グローバル化がもたらした結果であることは言うまでもない。そのため、グローバル教育のように地球全体を視野に入れて地球益の発想で物事を判断する能力を身に付ける必要性がますます高まっているのではないだろうか。言い換えると、グローバル化がもたらしたコロナ禍という先行きの見えない情勢を多角的な視野で捉える機会を提供するために、グローバル教育を継続していかなければならないのである。

本稿では、上記のような現状を踏まえて、今後の教育活動に活かすことを目的に、本校で2020年度から2021年度に実施したコロナ禍におけるグローバル教育の実践について報告する。

2. グローバル教育の実践事例

(1) 総合探究：国際協力×SDGs (2020年10月～11月)

総合的な探究の時間⁵を活用して「国際協力」と「SDGs」を題材とした授業を実施した。SDGsを通して国際協力の意味を考え、多角的な視野に触れることを目的に1年生から3年生までの26名が参加した。以下は全3回 (計6時間) の単元計画及び参加者の感想⁶である。

⁵ 本校の総合的な探究の時間は、通常カリキュラムとは別に様々な講座を用意し、生徒が各自の興味・関心に応じて履修する授業である。

⁶ 2020年度教師海外研修代替国内研修報告書 ～「持続可能な社会の創り手」を育てる授業実践集～

【単元計画（全3回）】

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	SDGsの概要と日本の社会問題	<ul style="list-style-type: none"> 先進国と途上国について視点をずらしてみる。 SDGsの概要を理解する。 日本の社会問題とSDGsとの関連性を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本とキルギスの高校生におけるアンケートを比較して、「なぜ日本の高校生と日本とは異なる社会・文化を持つキルギスの高校生が同じ欧米諸国に興味を持つのだろうか？」について意見を共有する。 国連作成のDVDを視聴してSDGsの概要を理解する。 SDGsに関係すると思われる写真を見てSDGsのどの目標に関連しているのか意見を共有し、発表する。 (写真は生徒が事前に1枚撮影) (例：通勤電車・コンビニ弁当・ゴミ不法投棄) 「持続可能な開発レポート2020」における日本の目標達成度について情報を共有する。 学んだことを踏まえて、「SDGsとは・・・」と端的に表現する。 	<p>【動画】 国連広報センター「持続可能な開発とは？」</p> <p>【資料】 「持続可能な開発レポート2020」</p>
2	SDGsと途上国の社会問題	<ul style="list-style-type: none"> 途上国の社会問題とSDGsとの関連性を知る。 カンボジアの社会問題を理解する。 資料を整理・分析して発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本校のカンボジア研修の写真を見て、カンボジアには、どのような社会問題があるのか自分の予想及びそれらの問題は、SDGsのどの目標と関連しているのか考える。 【ジグソー法】 カンボジアの「教育」「観光と環境」「保健・医療」「産業・労働」についての資料を読み、最も優先的に取り組むべきだと思う課題を理由とともにグループで話し合う。 (エキスパート活動) 一人一人がエキスパート活動で得た知識や考え方を、グループの他の人に説明する。 (ジグソー活動) カンボジアが抱える問題で、最も優先的に取り組むべき社会課題・SDGsの目標について意見を共有し、発表する。 (クロストーク活動) 	<p>【資料】 ジグソー法で使用するカンボジアの「教育」「観光と環境」「保健・医療」「産業・労働」についての資料</p>
3	国際協力とSDGsの役割	<ul style="list-style-type: none"> 先進国と途上国の問題を同時に解決するアイデアを考える。 SDGsを通して、国際協力の役割を理解する。 新たな価値を創造することで多角的な視野に触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> One Planet Caféの活動における写真を見て日本とザンビアの問題をどのようなアイデアで解決したのか意見を共有する。 ザンビアにある村の貧困問題と日本の環境問題を理解する。 ザンビアのオーガニックバナナ畑で通常捨てられる茎の繊維を利用し、日本の和紙工場で古紙を加え、質の高いバナナペーパーを作るOne Planet Caféの活動について意見を共有する。 日本とカンボジアの課題を「一気に串を刺すように」解決するアイデアを考える。 <ol style="list-style-type: none"> 日本の課題をできるだけ多く挙げる。 前回のエキスパート活動で使用した資料を使ってカンボジアの課題を挙げる。 日本とカンボジアの課題を同時に解決するアイデアを考え、SDGsとの関連性を含めて発表する。 	<p>【写真】 One Planet Caféの活動写真</p> <p>【資料】 カンボジアの「教育」「観光と環境」「保健・医療」「産業・労働」についての資料</p>

【参加者の感想】

・第1回：SDGsの概要と日本の社会問題

写真を見ながらSDGsについて考える時間では、自分では思いつかないような意見もグループの人との話し合いで共有できたので良かったです。例えば、スーパーのカゴに沢山のお弁当が入っている写真を見たときに、私は「プラスチック容器による環境破壊」を真っ先に思いましたが、他の人は「手頃な値段で食べ物が手に入る」と考えました。同じ写真を見ても、SDGsにおいてプラスな面とマイナスな面があることに気づかされた瞬間でした。

・第2回：SDGsと途上国の社会問題

カンボジアなどの発展途上国において、予想される問題として、貧困や都市部と郊外における経済格差を中心として考えていました。今回、グループ内での話し合い、他のグループとの発表・比較を通して、根本的に考えると「教育」に繋がることに気づきました。しかしながら、これらの情報はカンボジアという国の表面的問題に限られてしまっていると思います。一方で、こちら（先進国）から見た課題が実際に現地では問題として考えられていなかったり、それが普通のこととして考えられていたり実際の生活を通して、現地の人の目線から考える必要があると思います。

・第3回：国際協力とSDGsの役割

私のグループでは、カンボジアのゴミ問題と日本の過疎の問題を解決するアイデアについて話し合いました。話し合いで出た案は、まず、日本の過疎化地域特有の材料や技術を利用したゴミ箱を作り、それをカンボジアに買ってもらう、そして、そのゴミ箱をカンボジアのゴミが溢れる川の周辺地域に設置するというものです。話し合いでは特に、過疎化地域特有の材料、技術は何であるかを考えるのに時間を多く割きました。2つの問題を解決する一つのアイデアを考えるのは、前回の資料やグループでの話し合いがあっても、とても難しかった。

たです。しかし、「多角的な視野」は、こういう（今回のテーマのようなことを考える）時に必要なんだと思いました。

・全体の感想

「多角的な視野から考える」がテーマなだけあって、グループごとに違った意見が沢山出てきて大変勉強になった。2回目の授業は特に、エキスパートで分かれて情報をシェアするときの伝え方や捉え方が人によってそれぞれであるし、与えられた情報から思いつく事も人それぞれで、異なった思考回路をもつ人と意見交換する楽しさを改めて感じた。多様な考え方が混在するこの世の中で相手の意見を否定せず受け入れることは大切だと思った。自分の考えをより深めることができるし、新たな発見もあるかもしれない。相手の意見は否定せず、よりよい方向にもっていくという考え方は、大人になってからも忘れないようにしたい。これからも社会問題や世界の問題が尽きることはないと思うため、多角的な視野から物事を考え、積極的に自分の意見を持つと思った。



グループワーク（ジグソー法）の様子

（2）The Global Enterprise Challenge（2021年3月）

The Global Enterprise Challenge（GEC）は、高校生を対象に世界が共通に抱える社会問題をテーマにした課題が与えられ、12時間以内に持続可能な開発目標（SDGs）に則ってそれを解決するための事業アイデアを英語で事業計画書とプレゼンテーション動画にまとめて提出する国際ビジネス競技大会

である。国内予選と世界大会の二つのステージから構成されており、国内予選で最も優れた成果を残したチームは世界大会に出場する⁷。本校では、Cosmic seeker（8名）とLink（7名）が国内予選に参加して事業計画書とプレゼンテーション動画を提出した。惜しくも世界大会に出場することはできなかったが、英語での事業計画書の書き方や動画編集ソフトの使い方など通常の教科学習とは異なる学びを得る機会になった。国内予選までは以下のような流れで進めていった。

【校内事前学習①】

GECでは、与えられた課題について科学技術を活用したSDGsの理念に沿った事業計画を提案するため、SDGsの概要を理解する事前学習をオンラインで実施した。授業は、MDGs（ミレニアム開発目標）からSDGsまでの歴史的変遷や各目標の関連性及び同時解決性などSDGsの特徴を中心にワークショップ形式で行った。SDGsの目標（価値観）をツール（道具）として使い、自分たちの生活に反映させて自分ごと化することがGECでは求められている。

【事前学習会】

事前学習会は、国内予選の模擬トライアルである。GECは、基本的にインターネットを使用した競技であるため、接続状況を確認して事業計画書の書き方や動画の提出方法などを国内予選と同様の環境で練習することを目的としている。事前学習の課題は、「科学技術を使って、コロナ禍の中リモートで仕事をしている人や在宅で勉強している人に役立つ新しいビジネスアイデアを提供せよ」であった。参加者は、12時間で課題の解決につながる事業アイデアを事業計画書と動画にまとめて提出した。事前学習会は、当日の国内予選と同じ環境で実施するので、GECの主旨やルール、必要なスキルなどを確認する有意義な機会であった。

⁷ <https://entreplanet.org/GEC/>

【校内事前学習②】

GECの事前学習会の反省から事業アイデアを考えるための情報及びデータ収集の方法を学ぶ2回目の校内事前学習を実施した。スマホの製造過程に関わる全ての人々が公平になるフェアフォンの事業アイデアを実現することを題材とした。使用される鉱物資源や製造過程を理解するだけでなく、紛争鉱物を使わないスマホの普及（Dodd-Frank法）や鉱物資源の価格低下（タンタル：2004年2ドル・2015年0.7ドル）などの情報やデータを収集し、分析した。実際のフェアフォンという事業アイデアを説得力のある商品にするために必要なプロセスを体験することで国内予選のための準備ができるように留意した。

【国内予選】

2021年3月22日AM8:00～PM20:00に国内予選が行われた。挑戦する課題は、「現代の人間が次々と作っている大量の廃棄物が地球の環境や生物に大きな影響を与えている。この進行中の危機に対応するために、私たちが生産しているゴミを減らすだけでなく、利用する原材料や使用方法を含めて製造品を再検討する努力が進められている。あなたのチャレンジは、従来製品のデザインや部品材料、製造過程、製品寿命終了後の処理などの様々な側面を見直し、地球環境への影響を軽減する革命的な新しい製品を考案するために科学技術を使うことである」であった。本校のCosmic seeker（8名）とLink（7名）の事業アイデアは以下である。

・課題

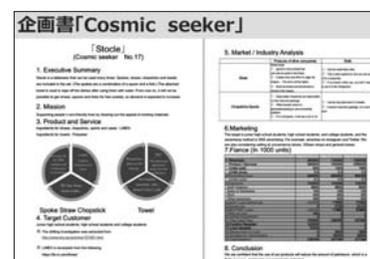
Your challenge is to take a fresh look at the various aspects of an existing product—design, component materials, the manufacturing process and disposal at the end of the product’s life—and use science and technology to come up with a revolutionary new product that will have a reduced impact on the global environment.

・Cosmic seeker

株式会社TBMが開発・製造する素材LIMEX⁸を使用したスプーン・フォーク・ストロー・箸とタオルを一つにしたポータブル食器セット（Stocle）の販売を計画し、プラスチックごみの削減を目標とした事業アイデアを提案した。

・Link

コロナ禍における使用済み不織布のマスクを回収するために、殺菌・消毒作用のあるヒノキを活用したボックス（Link Box）の設置を計画する事業アイデアを提案した。また、プラスチックであるポリエステルやポリエチレンの使用を削減することを目標としているため、回収したマスクをリサイクル会社へ送るシステムを考案した。



国内予選の様子

⁸ <https://tb-m.com/limex/about/>

(3) 世界に思いを馳せるプロジェクト (2021年5月・10月・2022年2月)

コロナ禍では海外との交流が制限されてしまうため、生徒は国内事情に目を向けてしまう傾向がある。そのため、世界情勢を考える機会を作ることを目的に、外部講師の方をお招きし、オンライン形式を活用して各学期に一回ずつ実施した。

【ミャンマー (1学期：72名)】

本校の卒業生である竹谷友里さんが日本語教育関係のコーディネーターとして、独立行政法人国際交流基金からミャンマーに派遣されていたため、2021年2月に起こったクーデターの背景や現地の様子をオンラインでご講演いただいた。

参加者の感想

- ・ 普段テレビで報道するような表面的な内容ではなく現地についての詳しい内容的な内容について学ぶことができました。普段はニュースを何気なく見ていただけだったけれど今回の活動を通して今度から気になったニュースはそれに関わっている人から詳しい話を聞きたいと思います。
- ・ ニュースでミャンマーの話は見ていましたが、自分が体験したことではなく、今の日本では起こり得ないことだったので違う世界のように感じていました。しかし、ミャンマーについて調べていくうちにとても深刻で、悲惨な事態が起きていることを知りました。今回、このプロジェクトに参加したのは、何も知らなかったことと知ろうとしなかったことが恥ずかしいと思ったからです。私だけでなく、他にも知ろうとしていない人はたくさんいると思います。このような機会を設けていただけたので、私は知ることができました。家族とミャンマーについて話し合ってみようと思います。

- ・ 事前学習⁹の動画を見て疑問に思っていたことを解決できただけでなく、ミャンマーで今起きていることに対してさらに詳しく知ることができて、とてもためになったプロジェクトだった。初めてオンラインツールを使ったが、スライドやお話もとてもわかりやすく、対面で話を聞くとときと変わらないように感じた。日本だけでなく他国の政治情勢や問題に興味があるので、今回のプロジェクトをこれからの教訓に生かしていきたい。

【イスラエル (2学期：16名)】

JICA (独立行政法人国際協力機構) で勤務していたイスラエルに滞在歴のある内藤徹さんに「イスラエルとパレスチナから対立と対話を考える」をテーマにオンラインでワークショップ¹⁰を実施していただいた。

参加者の感想

- ・ イスラエルとパレスチナ、という両者の対立関係から、自分達の身近な『対立』について考え、意見を共有できたことは、なにより楽しく、価値あるものでした。物事には必ず理由があって、この両国間の対立にも必ず理由があります。今回はその理由について深く考え、これから私たちが何をすべきか、世界は飽和化しつつある国際的問題とどう向き合っていかなければならないのか、という問題を実感し、熟考できました。物事が存在する数だけ存在意義や価値観も大きく変わってきます。個人単位でも考えや価値観の合わない相手と面と向かって話し合うことでさえ難しいのに、国や国際単位で話し合いの解決など尚更難しいのでは？、多様化することが本当の平和への道なのか？、などなど、講義終了後に考えたことは多数ありました。僕たちの使命は、これを『提案』で終わらせず『実践』することだと思います。自分の

⁹ 事前学習としてミャンマーについての動画や資料、ニュースなどから聞きたいこと・調べてもよくわからなかったこと・疑問に思うことなどをまとめ、レポートを提出した。

¹⁰ パレスチナ問題を題材に「考えの違う他の人とともに生きていくのに大切なことは何か」を考えるワークショップを行った。

中でまた一つ成長できたと思います。

- ・元々異なる宗教やイスラエル情勢には非常に興味があったため、現地での経験をお聞きするのは非常に面白かったです。またそれだけでなく、自分が何を学びたいか、大学で何をするか、主体的に行動する原動力にも繋がりました。現地で実際に体験されている方と、今回のように接することができるのはとても貴重な経験になりました。
- ・イスラエルとパレスチナの問題にはイギリスも関係していることが分かりました。グループで話し合いをしてどの国が悪いとは決められないという考えになりました。イスラエルとパレスチナの問題を自分たちに置き換えてみた時お互いを考えることが必要だと思ったし歩み寄ろうとして駄目だったら逃げることも必要だと思います。ニュースの映像では戦争の辛さや怖さを知りました。子どもが早く戦争が終わって外で遊びたいと言っていました。早くそれが実現して欲しいです。

【ブータン・バヌアツ（3学期：35名）】

元JICAブータン事務所長で現在は横浜国立大学国際戦略室に勤務している仁田知樹さんとバヌアツで青年海外協力隊として活動していた浦輝大さんにオンラインで「ブータンとバヌアツの人々から考える幸せの価値観」をテーマにご講演をいただいた。最後に「自身の生活に活かせることは？」という問いを設定して、参加者全員で「幸せの価値観」について意見を共有した。

参加者の感想

- ・日本に住む私達は、常に進化や変化を求めてしまうけれど、ブータンの「足るを知る」というお話やバヌアツの「毎日同じことが幸せ」というお話を聞き、国によって幸せの価値観や考えに大きく差があることを知りました。私

達にとっての幸せは必ずしも世界の人々の幸せとは限らないから、国際協力をする時には相手国について深く知り、相手の立場になって支援などすることが重要だと感じました。また、このことは国と国だけでなく、個人と個人にも言えることだと思いました。人によって価値観や幸せへの基準やものさしは違うから、自分の考えを押し付けるのではなく、相手の考えやものさしを尊重することがグローバル社会を生きていく上でも、人として過ごしていく上でも大切なことだと思いました。

- ・前に、阪神淡路のプロジェクトで地方創生のお話を聞いた際、「私達が当たり前前に幸せと思っていることは、実は幸せではないんじゃないか」という話がありました。その時はうまく理解出来なかった話が、今回ブータンとバヌアツの話を聞いてよく理解できました。幸せとは、満員電車に乗り、朝から晩まで学校（もしくは会社）で過ごすことだけでは無く、家族や自然、伝統を大事にしながら過ごすことでもある。そして、今までなんとなく分かった気だったSDGsの『持続可能な社会』が、「釣った魚を与えるのではなく、釣り方を教える」「体育を子供に教えるのではなく、大人にも教える」ことを聞いて、なるほどと思いました。毎日、前よりいい成績を取らなければ、と考える中で、たまには今回聞いた「毎日同じ過ごし方でもいいじゃないか」という考えもあることを思い出そうと思いました。
- ・今回のお話を聞いて感じたのは挑戦することの大切さでした。お二人共海外へのボランティアなどでたくさんのことを経験できたと言っていました。しかしそれができたのは海外へ行くことを決めたからだと思いました。あまり今回はそこは重要視されていませんでしたが、海外へ行くのはきっと悩んだと思います。その中で挑戦してたくさんのもので得てこうして私たちに伝えられるというのは本当にすごいことだと感じました。私自身も日々の生活の中で何かに挑戦していけたらいいなと思いました。

・ブータンという国は、小さい頃によく国旗を見ていて国の名前が面白いなと思ひ、勝手に身近に感じていた国でした。昨日、仁田さんにブータンという国は国王が自ら民主化を進めたり、GNHという概念を提唱してそれを国の政策の中心とし、ただ提唱するのではなく具体的な指標を示して行動に起こしたりしているというお話を聞いて、とても驚くことばかりでした。また、自分が抱いていたイメージの「幸せの国」というのは、自然とそうだったというよりは、国王をはじめとした様々な人達の努力による結果なのかなと思いました。また、浦さんのバヌアツでの青年海外協力隊のお話も驚くことばかりでした。やはり、私もボランティアに行くとなったら必ず結果を残さなければいけないと思うので浦さんがバヌアツの人に何か結果を残して欲しかったのではなく、バヌアツにいてもらったことが嬉しかったと言われたというお話を聞いた時、とても感動しました。常日頃前だけ進んで成長しなくてはと少し思っているところがあったので、バヌアツでは毎日変わらない日常がいいという考えが一般的と聞いてそう考えてもいいのだと心にゆとりができた気がしました。ブータン・バヌアツのお話を聞いて新しい価値観を知ることができて嬉しかったです。また、参加したいです。



オンライン講義の様子

(4) キルギス共和国との交流授業 (2021年5月・9月)

キルギス共和国の首都ビシュケクにある24番学校の高校生と英語の授業の一環として2回オンラインでの交流を実施した¹¹。近年、キルギスでは、教科書の改訂や授業時間の増加などを含めて英語教育に力を入れている。そのため、本校とキルギスの学校の生徒が英語を使用する機会を作り、共通語としての英語の役割を認識することで通常の英語授業のモチベーションを高めることを目的にした。

【第1回：お互いを知ろう (5月)】

事前にお互いに日本・キルギスの学校生活 (授業・部活動・課外活動等) について知りたいことを考え、当日は、一人ひとり英語で質疑応答をした。その後、キルギス側からその交流授業の様子をまとめた動画が作成され、本校の生徒も日本の学校生活を伝える動画を作成して交流活動を行った。



作成した動画の一部 (左：交流授業の様子 右：キルギスの伝統的な踊りの練習風景)

¹¹ 筆者は、2018年7月から2020年3月までJICAの現職教員特別参加制度を利用して青年海外協力隊としてキルギス共和国で英語教育の活動に携わった。

【第2回：お互いの伝統・文化を紹介しよう（9月）】

2回目の交流授業では1分間スピーチを行った。テーマを伝統・文化に設定し、日本の高校生は、柔道・お正月・節分・ソフトテニスなどが話題に挙がり、キルギスの高校生は、食べ物・イスラム教のお正月・騎馬ラグビー・楽器などについて発表した。



キルギスとのオンライン交流授業の様子

（5）グローバルプロジェクト（2021年4月～2022年3月）

グローバルプロジェクトは、LHR（ロングホームルーム）を活用して希望者（11名）を対象に実施した授業である¹²。テーマは、「学校の身近な問題と海外の課題を同時に解決できるアイデアを考え、SDGsの達成に貢献する」である。LHRの時間で5回、放課後に5回実施し、生徒はアイデアプランを考え、最終的には、SDGs Quest みらい甲子園首都圏大会¹³に応募した。

SDGs Quest みらい甲子園には、2チーム（グローバルプロジェクトA・B）が参加登録をした。グローバルプロジェクトAは、一次審査を通過し、最終選

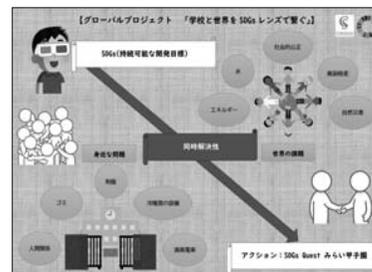
¹² 本校58期の2年次では、各生徒が希望のプロジェクト（ボランティア・歴史・コンサート・理数探究等）に分かれて、LHRを実施した。

¹³ 高校生が持続可能な地球の未来を考え行動するために、SDGsを探究し、社会課題解決に向けたアイデアを考える機会を創発し、そのアクションアイデアを発表・表彰する大会である（<https://sdgs.ac/>）。

考となる二次審査にエントリーすることになった。二次審査では、一次審査に提出したプランデータを基にプレゼンテーション動画を作成した。動画は、審査員や協力関係者に限定公開され、基準に沿って審査をいただき、最優秀賞等が決定する。二次審査にエントリーされたチームは、3月26日（土）に開催された首都圏大会ファイナルセレモニーにてプレゼンテーションを行った。以下は、SDGs Quest みらい甲子園への応募までの授業の流れである。

【Step 1：学校の身近な問題を考える】

最初の授業では、グローバルプロジェクトの概要を説明するとともに、学校生活でSDGsに関連するものを挙げ、目標ごとに分類することでSDGsの特徴を把握した。次に、学校生活の課題とSDGsとの関連性をまとめ、解決すべき問題を特定し、アイデアプランを作るためのテーマについて考えた。



プロジェクトの概要



問題の特定

【Step 2：アイデアプランを作成する】

夏休みには、各自で「学校の身近な問題と海外の課題を同時に解決できるアイデア」を考え、ワークシートにまとめた。学校の食堂におけるフードロスの削減と世界の食糧事情を改善するアイデアや学校における紙の使用削減と世界の森林破壊の問題を解決するためのアイデアなどが提案された。

【Step 3：アイデアプランを共有する】

夏休みに各自考えたアイデアプランを共有し、実現可能なプランを選択した。また、2グループに分かれ、意見を出し合いながら選択したプランに必要な情報を加筆・修正することで新しいプランを作成した。

【Step 4：SDGs Quest みらい甲子園首都圏大会に応募する】

上記のアイデアプランをSDGs Quest みらい甲子園のテンプレートに合わせて作成し、2チームが参加登録をした。SDGs Quest みらい甲子園の主旨は、持続可能な社会を実現するために解決したい、あるいは変えたいと考える「探究テーマ（課題）」を一つ選び、その解決策となる具体的な「SDGsアクション」のアイデアを考えることである。



アイデアプランの作成

【Step 5：各チームのアイデアをブラッシュアップする】

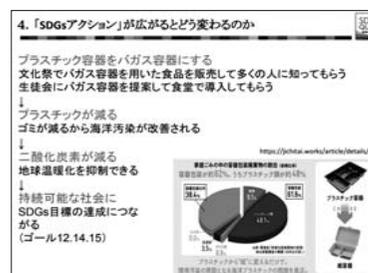
参加登録後、最終的なアイデアプランを提出するまでには2か月ほどあるため、2チームでお互いのプランを共有し、ブラッシュアップする機会を作り、最終的に以下を提出した。

・チームA

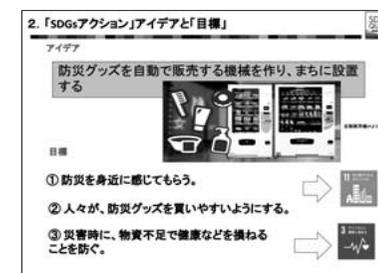
コロナ禍で食堂が使えず、テイクアウト用のプラスチック容器の使用が増えたことに着目し、サトウキビのバガス¹⁴を使用してお弁当箱の容器を作ることでプラスチックを削減するアイデアを提案した。

・チームB

防災に対する意識を高めるために、防災グッズを自動で販売する機械を作り、まちに設置し、災害に強いまちづくりを目標とした企画を立案した。



バガスを使用したお弁当箱



防災グッズの自動販売機



ファイナルセレモニーでの発表の様子



¹⁴ バガスというのはサトウキビから砂糖汁を搾ったカスで、バイオマスとしてエコ容器や紙原料に活用されている。

3. おわりに

最後に、コロナ禍におけるグローバル教育の実践事例を踏まえて、今後の教育活動に活かすべき二点について述べたい。

第一に、Zoomなどの使用によるオンライン授業の活用である。グローバル教育は、地球的視野を持つグローバルシティズンの育成を目指すため、実際に海外を訪れる機会を作ることを目的にする傾向がある。海外での実地研修は、言うまでもなく、生徒にとって有益な体験となるが、学校現場では、宿泊日数や費用などを踏まえて決定するので比較的訪問することが容易な国になることが多い。今回オンライン交流授業を実施したキルギスは、日本から遠く離れていて費用も高く、通常学校のスタディツアーとして訪れることは難しい国である。しかし、オンライン授業を活用することで、研修などで訪れることがない国の人々とも交流できるため、生徒にとって視野を広げる機会になるだけでなく、教員にとってもグローバル教育を展開する選択肢（多くの国々を対象としたプログラム）を増やすことができる。また、今までは、東京近郊に在住している講師の方に来校していただくことを念頭に授業を計画していたが、オンラインを活用することで、交通費などを考慮することなく、日本全国または海外から講師の方をお招きして授業を展開することができる。今回の「世界に思いを馳せるプロジェクト」では、その利点を生かすことで幅広い国々で活躍されている方にご講演をいただくことができた。

第二に、外部団体の主催するプログラムやコンテストへの参加である。コロナ禍では、学校内での活動が中心になり、他校との交流や企業・行政機関・国際機関との連携は難しい状況であることが多い。しかし、外部団体の主催するプログラムやコンテストを活用することによって、他校の事例を知ることができたり、外部団体からのフィードバックを得ることができたりし、生徒のモチベーションを高めるだけでなく、校内から外の世界に目を向けるきっかけを与えることができる。本稿では、The Global Enterprise ChallengeやSDGs Quest みらい甲子園の参加について紹介したが、これらは、校内での学習成

果を発表し、外部機関からの客観的な評価や協力を得る貴重な機会となった。

上記のようなオンライン授業の活用や外部団体の主催するコンテストへの参加は、筆者にとってコロナ禍であるため、目を向けることができたグローバル教育の視点であった。本校では、来年度から新しい学習指導要領の実施に伴い、「総合的な探究の時間」が時間割に組み込まれる。本稿の「総合探究：国際協力×SDGs」は、グローバル教育における探究活動の一つであるが、オンライン授業の活用や外部団体の主催するコンテストへの参加などを補助的な役割として活用していくことで、さらなる充実したプログラムにしていくことができると実感している。今後の総合的な探究の時間を活用したグローバル教育の実践については、これに続く論考を参照されたい。

参考文献

石森広美（2017）「未来を拓くグローバル教育の可能性」『教育フォーラム』59、124-135頁。

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京センター（2021）『2020年度 教師海外研修 代替国内研修 報告書』92-97頁。

Hicks, D.(2007) Principles and precedents. In D. Hicks & C. Holden (Eds.), *Teaching the Global Dimension* (pp.14-30). Abingdon, Oxon, New York: Routledge.